



日本政府ヨリ余ヲ以テ比律悉府日本公使ノ任  
 ヲ命セシ理由中日伯兩國間ニ結ヒシ現行ノ條  
 約改正ノ件ニ付キ貴國政府ニ一ノ通報ヲ呈送  
 スルノ希望ヲ含有セリ  
 該件ノ為メ余ノ受取セシ訓條ノ譯文ヲ閣下ニ  
 呈セシカ尚ホ又日本政府ノ切望セル論旨上ニ  
 三ノ解説ヲ添加スルノ許可ヲ得ニテ茲ニ閣  
 下ニ請求ス  
 該訓條中日本政府ハ此改正ニ由リ以テ帝國ニ  
 付属セル獨立國ノ權利就中稅則及ヒ通商章程



大正十一年四月  
 栗本真次郎 寄贈

栗本真次郎 譯

14  
 A 939





ヲ規定スル所ノ權利ニ干スル者ニ付完全之ヲ  
享有セント欲スル公報ニ閣下ノ着眼アラニ  
ヲ希望ス  
外国通商ノ規則ヲ決定スルハ都テ獨立不羈ノ  
國ニ限リテ付屬セル特權ニシテ今之ヲ以テ該  
公報ノ憑據ニ供スルハ余ハ不要ナリト思惟セ  
リ而シテ獨立國ノ有セル權利中コレ最モ一定  
ニテ敢テ論議ヲ容レサルモノナリ然ルニ日本  
ニ於テハ條約アリ以テ之ヲ実行スルヲ妨碍セ  
リ故ニ吾政府ハ此權利ヲ恢復スルヲ要シ且其  
經驗ニ乏シキヨリニテ今ヲ距ル二十年前失ヒ  
シ所為自由ノ權ヲ復有スルヲ請フノ時機正ニ  
至レリト思考セリ

條約改正ノ權ハ載セテ條約中ニアルハ閣下モ  
已ニ詳悉セル所ナリ將此權ハ假令該約中ニ脱  
漏スト虫氏通商ノ條約タルマ元來永遠常存ノ  
モノト思考スルヲ得ス其性質タル已ニ時勢ト  
共ニ變更ス可ク且日本ノ政畧方向及ヒ形勢上  
實際經過セシ無數ノ沿革アリ此一事ノミニテ  
前記條約變更請求ノ理由ヲ証スルニ已ニ十分  
ナル可シト吾政府ハ確信セリ  
前述ノ一般ノ論意ノ他吾政府ハ邦國會計ノ需  
用ニ充ルカ為メ收入ヲ増加シ且同時ニ新定ノ  
間稅ヲ設ケ以テ方今國民ニ重課スル所ノ二三  
ノ直稅ヲ廢スルハ必然ナルノ点ニ閣下願クハ  
注意アラニテ余ハ希望セリ



此他又一ノ注意ヲ要スルハ即チ現今ノ税則ニ  
循カヒ日本國ニ外國商品ヲ輸入スルハ吾政  
府ハ之ト同種類ナル日本國產物上ニ間税ヲ課  
シ得可ラサルニアリ而シテ之カ為メ間税收額  
上當然收入ス可ク且巨大ナル財源ヲ閉塞セリ  
吾政府ハ日本國現今ノ形勢且需用ニ干シ政畧  
及ヒ理賤ノ二個ノ理由ニ原キ該國ノ急務及ヒ  
裨益ヲ度リ以テ税則ヲ自由ニ決定スルノ權利  
實行ヲ請求シ得可キモノナリト考察セリ然リ  
而シテ此協議ノ際他二三ノ問題モ亦發生ス可  
シト亟ク吾政府ノ最モ意ヲ注クハ税則ノ問題  
ニアリ  
前ニ粗陳述セシ理由ノ他尚ホ閣下ニ告ント欲

スルハ外國產物上ニ課ス可キ税額ハ百分ノ五  
ヲ以テ其最高額トナスノ義務ヲ日本國ニ負擔  
セシメシ外國政府ハ相互報酬ノ件ヲ更ニ許サ  
バルニアリ而シテ日本商品ニハ地球上諸港ニ  
於テ其種類ニ從ヒ各其地方最高ノ税額ヲ課シ  
吾國至重ノ輸出品ノ内例ハ茶及ヒ煙草ノ如  
キハ大率子各所ニ於テ特別高額ノ税ヲ課セル  
コレナリ  
外國人ニ付与スル裨益タルヤ此ノ如ク例外且  
偏行ノモノナリト亟ク現今ノ方法ハ輸入品ヲ  
シテ昌盛ナラシムルニ至ラス數年以來外國高  
品販賣ノ數ハ増加ノ徴ナク輸入税額ハ殆ント  
烏有ニ屬シ貿易ノ景況ハ究テ寂寥ニシテ外國



人部テ互市ノ常ニ振ハサルヲ痛歎セリ  
此ノ如キ形状ナルカ故ニ日本商品諸種上ニ課  
スル輸出税ヲ廢スルハ固ヨリ必要ニシテ一旦  
該税ヲ廢スルニ至ラハ外國ニ於テ吾國產物販  
賣ヲ盛ニシ外國ヨリ來レル物品購求ヲ増シ需  
用ノ數モ亦從テ多カル可キハ毫モ疑ヲ容レサ  
ル所ナリ  
吾政府ニ於ルハ此ノ如キ確信ヲ有スルカ故ニ  
條約改正ニ際シ其便宜ニ從ヒ且其改正中預メ  
指示セル定則ニ照シ輸出税ヲ廢セント欲スル  
ノ意アリ  
此他尚ホ閣下ニ陳述セント欲スル一事アリ  
外國通商ノ景况上改良ノ件ニ付キ余ノ開陳セ

シ希望ハ好果ヲ得サルト看做シ輸出入税上ニ  
個ノ改革ハ互市ヲ再ヒ昌盛ナラシムルニ至ラ  
サルト明証スルアラシハ措テ論セス日本政府  
ノ請求ニ及スルノ理由ニ據リ以テ之ヲ拒絶ス  
ルハ到底做シ能ハサルモノニ類セリト該政府  
ハ思考セリ  
以上陳スル所ノモノハ普通ノ問題ニ非スレテ  
他ノ之ヨリ最モ至重ナル問題ニ干涉シ且日本  
及萬國トノ交際ハ特ニ通商ノ旨趣ニ限りテ永  
遠保續スヘキ者ニ非サルハ閣下ニ於テ詳悉諒  
解アラシハ余ノ更ニ狐疑セサル所ナリ  
閣下ノ志操公正ナルハ余ニ於テ確信スルカ故  
ニ茲ニ現今日本ノ形状ニ付諸種ノ性質ヲ陳列



シ以テ閣下ノ高覧ニ供スルノ榮譽ヲ有セルトナ  
リ敬具

比律悉府ニ於テ一千八百七十八年七月九日